

俳句雜誌



2021・7

SORA 97号

成層圏(2)

柴田佐知子

筆談も交へて母と夕端居

一冊に絵描きの一世雷遠し

夕映を大きくしたる金魚玉

髪洗ふ隙間だらけの身となりて

上布着てあつさりこの世離れたし

レース編むいつか成層圏を出て

夏襟や鬼となるため老いゆかむ

―「俳句四季」七月号より―

コロナ禍を詠む

マスクして浮世いよいよ狭くなる

―「俳壇年鑑」二〇二一年版より―

別の世に居るごと木下闇に立つ

東京 今井康子

三寒に絵描き四温に庭仕事
 思ひきり転んで泣かずつくしんぼ
 リヤカーに園児六人花あんず
 きまぐれに摘みし蒲公英胸に差す
 うたた寝の母に五月の光かな

北九州 横田敬子

立春や納屋に錆びたる五寸釘
 自転車に大きな荷物日脚伸ぶ
 軍艦に眠る遺骨やかひやぐら
 ベトナムの少年に会ふ春の浜
 ふるさどが遠のいてゆく卒業子

大阪 田岡千章

冴返るマリッジリング撫でて黙
 探梅行腰に遺愛のスキットル
 建国日更地物件幟立つ
 蒺藜草をんなにありて怒り肩
 かざぐるま買物カートに児を乗せて

北海道 押田裕見子

気の通ふ人との訣れ足袋洗ふ
 哀別の雪より白き骨拾ふ
 言の穂の氷りついたる川面かな
 風花やあなたの声とふと思ふ
 ひとつゆゑ立つも揺らぎぬ寒卵

北九州 兒玉充代

挿し木とは木のクローンやとの曇
 雨乞へば雨たまはりぬ遠蛙
 切り岸をひと息に越えつばくらめ
 小流れの先細りして豆の花
 鉄骨は高きに組まれ夕桜

兵庫 岩井京子

駆けまはる子に寒林のかがやけり
 黒猫の潜んでみたる冬の苑
 一葉も無き薔薇園や寒に入る
 一斉にひらく合図を待つ白木蓮
 雨混じる春一番の吹き荒ぶ

兵庫 大西乃子

新月の庭に出でけり春の猫
 内裏雛とほくの空を見てをりぬ
 もういいかいもういいよ鳥雲に入る
 白詰草でんぐり返りまだできる
 草餅を供へ愚痴など言うてみる

直方 吉田悦子

ぜんざいは逢ふ口実よ猫柳
 鬼に豆打ちて追ひ出す園児たち
 幼き手に兎となりし冬林檎
 父の庭母より継ぎて草を引く
 十年ののちの余震や冴返る

草餅や母の齡に近づきぬ

夕ざくら子に乗せて来るオートバイ

小流れと蝶と歩みを合はせ行く

花椿家族三代住みし頃

船の笛西へ東へ鳥曇



空集作品評

柴田佐知子

口上のやうな花火の先づ揚る

中田みなみ

花火大会は、もうすぐ始まりますよという先づれのような花火がひよろひよろと揚がる。これを譬えるときればと考えたとき、へ口上のやうな〜という表現はなかなか出てこない。みなみさんの柔軟且つ自在な感性が光る楽しい作品である。

捨てられしごとく鳴きゐる子猫かな

高倉 和子

拾はむとせし猫の子に噛みつかる

牧 康子

気乗りせぬ猫へしつこく猫じやらし

石井みゆき

以前、赤ん坊の泣き声が聞こえるので気になって出てみると、隣家の敷地に掌に乗るくらいの子猫の子が懸命に鳴き続けている。のぞき込むと尻込みして物陰に隠れてしまう。小さいながらもこの警戒心の強さは野良猫の子である。こんなにも鳴き続けて体力はもつのかと心配になる。暮れかかってきた道を見ていると遠くに猫が見えた。ゆっくり歩いていた

が、子猫の音が確認できたのであろう、真直ぐに駆けてきて、転がるよう歩む子猫を連れて消えていった。数時間必死に鳴き続けた声は忘れられない。

一句目のへ捨てられしごとく鳴きゐる子猫へは、私が見た子猫とは異なり大切に育てられていそうだ。それでもへ捨てられしごとく鳴いているのだ。貌をくしゃくしゃにして鳴く子猫が見えてくる。

二句目、人間を警戒する野良猫の子ならば、このような反応にもなるう。言葉の配列がなめらかで、情景が鮮明に映像化される。噛まれた方には申し訳ないが、下五のへ噛みつかるへが面白い。「噛まれけり」であれば、この句の臨場感はうすれると思う。寸景ながらいきいきとした句である。

三句目、もう猫は「遊んでやる気などないんだよ」と、飼主を無視。それ以上しつこくすると、いきなり猫パンチだ。

三句とも、猫の生態や気質を捉えた楽しい句である。

・第十回「空新人賞」受賞作品・

兒玉 充代



西国や畦を焼く火が田に流れ

春寒やひとひねりして反古となす

うぐひすやいつもの時間いつもの木

刻々の山の翳りや花辛夷

野遊びの水筒ろろんと鳴りにけり

やや長き影と歩きて春の野辺

よく晴れてさくらさくらと水のごゑ

葱坊主揺れておのおの元の位置

明易の夢は模糊とも確かとも

田植どき水を鍛へて水ぐるま

末席は欠伸しやすき冷房裡

釣られたる魚に声なし青嵐

石越ゆる水の歓喜や新樹光

行くほどに遠のく雲や風は秋

地下足袋が梯子下りくる松手入れ

山風に晩稲は花をいそぎけり

秀でたるものより摘まれ貝割菜

日の差して紅葉はさらにもみぢ色

秋の夜の鏡の奥の行きどまり

草ふかく雨のおよべる寒さかな

山の風山にをさまり迎春花

人は火を焚いてあそべり吉書揚

朝の日の雲を照らせる三日かな

朝拝の皇后さまの笑みほのか

初菑父母の知らざる世を生きて

行く年や四方に借りある心地して

白襖開くればそれも夜の深き

懸大根雲が消しゆく日のぬくみ

寒林の日差しまばらに鳥発てり

寒鯉に撒きし餌ひとつつつ沈む

空集抄 柴田佐知子抄出

口上のやうな花火の先づ揚る

中田みなみ

捨てられしごとく鳴きゐる子猫かな

高倉和子

手相なら死んでゐるころ亀鳴けり

えとう樹里

涅槃図のこれは鼬と申されし

永淵恵子

転ぶごと逃ぐる野焼の雉子かな

田中とし江

思ひまた同じところにレース編む

吉田 律

春愁や顔を洗へば袖が濡れ

戸栗末廣

大千潟夕べひもじき鳶低し

深川淑枝

両端は歪みてゐたる軒氷柱

曾根富久恵

歳ほどは生きし気もせずごまめ囓む

角野良生

正解を追はず求めず春炬燵

肥部早苗

腑甲斐無き男凍らす雪女

石橋幾代

小川跳び近道する子蝶の昼

河原敬子

老いてもその横顔が好き春夕べ

吉田悦子

拾はむとせし猫の子に噛みつかる

牧 康子

春風やしやがめば丸き膝頭

原 友子

一枚の踏絵に暗き展示室

松田明子

老いてなほ逆らふことも竹の秋

井上和子

少しづつ朝寝に余生奪はるる

森田明成

入学式終へし親子の頬紅し

秋 千晴

灘風に百年吹かれ松の芯

兒玉充代

菜の花の黄と黄が擦れ黄をこぼす

星加鷹彦

梅ふむむ京の言葉に囲まれて

大西乃子





味方一人欲しき夕べや桜東風
すかんぼや休日だけの渡し舟

A4に足らぬ自分史花かへで

ものの芽や試歩にいつもの休憩所

蕨餅もつたいないほどの黄粉

三椏や水音絶えぬ観音堂

沢に身を乗り出す茶店花こぶし

子雀に柔らかき足ありにけり

紺碧の水平線に松の芯

雛まつり跡形もなき蒙古斑

真夜は血の通つてゐたる雛かな

建国日まやかしのなき出汁をとる

少女期の友は鮮やかヒヤシンス

百歳の新聞投書春こたつ

堰越えてまた静かなり春の川

砂の山海へと返す春の波

創世記の大地もかくや野火走る

気乗りせぬ猫へしつこく猫じやらし

古希来るや花に紛るるピンク着て

流鏝馬に花びらまじる土を盛る

花菖蒲剪るとき妣の手を思ふ

外出の儘ならぬ師に桜剪る

冷索麵親族はよく集まりて

あたたかやたんこぶかくす絆創膏

桜満つこの星の空一つなり

駅弁の中にも春の来てをりぬ

西住三恵子

今井康子

林徹也

田岡千章

苑実耶

横田敬子

坂口学

山本則男

本多トミ

仲里奈央

押田裕見子

三井所美智子

青木朋子

松下きぬ代

佐藤和弘

松井順子

荷宮克代

石井みゆき

林れい

後藤園子

立花一枝

村上二三

あさなが捷

小島翠波

村上典子

畑由子

空集

柴田佐知子選



竜天に登る天女を従へて

捨てられしごとく鳴きゐる子猫かな

車座の真中にコーチ草青む

真白な皿を選びぬ春愁

朝桜乳吸ふ山羊の耳ゆれて

手のひらにうさぎの鼓動春の虹

双手あげ返事する子や春の風

捨雛へ吹きつけらるる川の砂

卒業生母と離れて歩きをり

手相なら死んでゐるころ亀鳴けり

衝立の向かうは海や梅見茶屋

さへづりに鳥籠の鳥落ちつかず

喜びも怒りも拳草萌ゆる

東京 中田みなみ

水を吸ふ音を聴きたし山毛櫨新樹

端々し山毛櫨の新樹を抱く君も

人魚でも釣るか父の日の旅装

新駅の一番電車海猫と来る

奉納の花火腰にて支へくる

口上のやうな花火の先づ揚る

行李より面影も出す白緋

銃声の打ち抜く空や冴返る

福岡 高倉 和子

福岡 永淵 恵子

兵庫 えとう樹里